

博士号請求論文要旨

工藝的アプローチによるリビングヘリテージの保存・利活用に関する研究 -ヴォーリズ六甲山荘におけるランドスケープデザインの実践-

大阪芸術大学大学院 芸術研究科

環境・建築領域 博士後期課程

角倉起美

1.研究目的

工藝作品を環境に組み込む工藝的アプローチを展開することにより、工藝の領域を拡大するランドスケープデザインの試みである。過去から受け継いだ文化財を含めた環境をどのようにして次世代に継承することができるのかについての研究である。テーマである国登録有形文化財ヴォーリズ六甲山荘の軌跡と環境整備プロジェクトを実現させることで、基本理念でもあるナショナルトラスト運動を推進し、実践的利活用の提案をする。関係性のデザイン基礎理論をもとに、リビングヘリテージをコンテキストとしてその保存利活用の手法を提案し、工藝作品とランドスケープの共創の実現を目的とする。

2.研究背景

ヴォーリズ六甲山荘は、1934年小寺敬一氏の夏別荘として建てられ、設計者 W.M.ヴォーリズの住む人の健康、住み心地を第一にする設計思想がよく現れた優れた山荘建築で創建当時の姿がそのまま残っている。現在、ナショナルトラストの理念のもと、認定 NPO 法人が所有し、保存管理活用している。筆者は 2016 年からこの活動に携わり、開発委員、運営委員、理事、工藝家として、構想、設計、施工を協働しながらアクションリサーチしている。その後、活動を継続している中で新たな展開が生じ、2020 年からの室谷邸門廊再建プロジェクトに繋がっている。



2017 ヴォーリズ六甲山荘での個展風景

3.研究方法

文化財建造物だけでなく、周辺敷地の環境整備をすることからも文化財を保護する理念や信念を引き継ぐための手法の一つとして取り組んでいる。この手法は、保存活用の分野を拡大させ、関わる人々の活躍の場を広げている。文化財は建物だけでなくその環境を含めた空間に存在するもの、人も含めて保存の対象となる。文化財保護の意義は管理保存だけでなく、活用することに意義がある。対象の位置付けによって、それぞれの理論活用のアプローチがあり、異なる領域が発生するが、そのことを多角的に考察する。

4.活動内容

2018年より山荘周辺地を活用した環境整備は、全体を構想計画し、①小寺池の復元では、上流からの小川を本流と池に引き込む水脈に分け、その基軸となる分水界に工藝作品を設置した。底の設置面には小川の流れがあり、注水も可能であることから植物が育つ分水石陶器を制作した。これからこの場所を守っていく人々の思いも育っていくように認識できる「神

籬」(人の思いの依代)としての役割、モニュメント性を持った作品である。②石垣広場の整備では、石垣を背景にイベント広場として「森のステージ」を据えた。石垣と木立に囲まれたステージは、小鳥の囀り、木漏れ日、木々や草花を揺らす時折吹く谷風などが空間全体でその場を演出し、響き合っている。③エントランス広場には陶を素材とするモザイクタイルで地図をデザインし「案内板」を制作した。これは2020年に「ヴォーリス記念きょうだいの森」と命名された環境の形態を写しだす類似記号(icon)であるとともに、回遊の方向性を指示する指標記号(index)である。成果として、家族連れや若い年齢層の見学者の増加が認められ、近隣の六甲山施設とのネットワークもつながり、癒しの空間を体感し、環境保護への関心が高まることが期待できる。六甲山園地事業として認可され、瀬戸内海国立公園内の一施設としても認められた。これにより、敷地内での新たな整備の際の諸条件が緩和される。

5.室谷邸門廊再建プロジェクト

室谷邸は、ヴォーリス建築事務所設計、昭和9年に建てられ、1996年国登録有形文化財認定もされたが、2007年一部の部材を残して解体された。残された部材は、神戸市が費用を負担管理し、保存されていた。上記の環境整備が完成していたことで、神戸市文化財課からは是非再建へ向けて、有効活用される場所として依頼された。六甲山賑わい創出事業としても認められ、公園施設の休憩所として再建した。部材である復元レンガや、床タイルなどは一部分しか残っておらず、新たに制作した。筆者は工芸家としても活動していることから、その領域においても携わった。さらに、ヴォーリスと共に当時近江兄弟社を支えた吉田悦蔵の邸宅(1913年築)で使用していた天然



室谷邸記念館

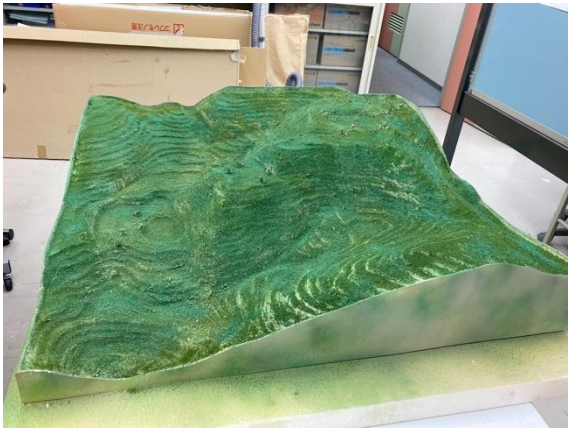
スレートも保存されており、親族からの寄贈も受け一部の屋根材等に活用することもできた。環境省の認可も得て、2021年3月に完成した。完成したことで、六甲山に神戸ゴルフ倶楽部のクラブハウスとヴォーリス六甲山荘、室谷邸記念館が鑑賞できることは、ヴォーリス建築愛好家には朗報であり、一般見学者にとっても歴史的建造物の保存方法にも多様な方法があることを理解してもらえる機会になった。一部ではあるが、いつか解体された時に解除された文化財の登録を、もう一度多くの人々の思いと、来歴のある貴重な建物として登録されることが望まれる。

6.研究活動内容のパネル及び模型制作

パネル及び模型を2022年1月8日～13日：大阪芸術大学「情報センター」と2022年2月8日～18日：あべのハルカス24階にある「大阪芸術大学スカイキャンパス」で展示発表しました。観覧していただいた方々へヴォーリス六甲山荘とそこで実践している活動を知っていただける機会にもなりました。「春になったらぜひ、訪れたい。」とのお言葉もかけていただきました。



全体展示風景



模型制作工程（素材：スチレンボード、カラスポンジ等）



1/200 模型敷地全体



1/50 模型石垣広場・小寺池



1/50 模型石垣広

7.最後に

本論は、工藝的アプローチによるヴォーリズ六甲山荘の軌跡と環境整備プロジェクトを実現させることで、基本理念でもあるナショナルトラスト運動を推進し、実践的活用の実現を展開した。関係性のデザイン基礎理論をもとに、リビングヘリテージをコンテキストとしてその保存利活用の手法を提案し、工藝的アプローチによるランドスケープデザインの共創の実現を目的としている。

ランドスケープデザインは1人でつくれるものではなく、多くの人材がその一部分に関わりながら、受け継いだ文化財を含めた環境に少しずつ手を加えて次世代に継承していく。その中

で筆者がどのように関わったのか、関わり得たのか、その貢献の仕方を考えること、提案し続けることが重要なことである。

さらに、本研究対象がナショナル・トラストの理念を持って活動していることにより、現在の日本におけるナショナル・トラスト運動へ繋がる文化財保護の歴史の流れを、世界からの影響を含めた多領域から探索している。この運動は、単なる環境保護ではなく、歴史的建造物や景勝地を国民の遺産として保持することで、愛国心や国民の一体感といったナショナル・アイデンティティを形成・強化することを意義としている。民間の力によって貴重な自然並びに歴史的資産を健全な状態に維持・管理する行為について、実践的な問題解決に向けて、各種領域（現状分析・理論構成・法律上の問題・非営利法人の受託能力・基金の開発・保存技術の確立・啓発と教育等）の研究を行い。その成果をもって先見的で建設的な提言をしていくことでこの運動が日本において定着・発展していくことを推進する。そのために、あらゆる分野の研究者実務家・学生・賛同者が共同研究・相互交流する必要がある。リビングヘリテージの伝承と継承のシステムを、ナショナル・トラスト運動のプロセスで包括的に実践することが有効的な取り組みとなる。

ステートメント

自己の立ち位置

・要素の構成によって意味（テーマ）が生じる
 ・要素同士の関係性のデザインが重要

要素の構成からテーマを言語化し、作品として
 具体的にどのように具現化したかを示す

自己が何の専門家であるのかを認識することからものづくり（行為）が始まり、常にリフレクション（reflection 省察）を意識する



ミクロの視点からマクロの視点へのパラダイムシフトを繰り返す
 科学者（研究者）は研究によって知識を生み出し、対応する専門家に提供する
 行為の中の省察（reflection in action）
 行為にもとづく省察（reflection on action）
 （ドナルド・アラン・ショーン）



人は何かしらの専門家である（思考、志向、嗜好から導く）ケアする人をケアするシステム
 育って来た環境によって様々
 臨床の知として現場に携わる

各専門家は他領域の知識や情報を蓄積することで人としての自己実現理論を追求（欲求）する
 多くの矢印を一生をかけて学ぶ努力が必要

社会は、様々な専門家がそれぞれの「役割」を果たすことによって、維持され、発展していく

科学・統合的知性創造のために 吉川弘之 CRDS 日本学術会議2011

素材、環境、他者、自己との対話によるデザインの展開

工藝家である筆者はこれまでの分野から他分野の専門家である方々と話す機会を持つことに意識し、アクション・リサーチし、対話によるデザインを試みたことで、理論と実践を分離的に捉えるのではなく、それらを相互に関連するものとして捉え、研究者が直接関わっている実践的問題を体系的に理解し、計画を練りながら改善を図り、実施過程においても問題の解決具合を観察しながら必要に応じて、それぞれの立場、段階で対話し、計画を変更しながら解決へ向けていくアプローチが必要である。

制作者としての立場から、夢中になって制作している時には気づかないことが、後で振り返ったら、結果としてこういうことだったのかと、わかることがある。制作理論的に「中動態」的な立場で、事後的に制作することもある。その行為として、「行為の中の省察」を言語化することが大切である。位置付けられる体系の認識に意味がある。

本研究で導き出された知識と経験は、進化と更新、蓄積を繰り返す。リフレクションし、その文脈性を描き出すことで一般化が図られる。この研究は研究と制作、理論と実践、行為と知識は分離することができないものであることが実践することで改めて認識した。ものをつくること、人工物が生活世界にもたらす帰結からその設計へフィードバックする回路を持つことが重要である。社会的価値の創出を目的とし、応用研究の対象になるための条件を発見し、必要な知識を領域の制限を超えて収集し、それらを生成、統合する新しい分析の形の研究として、デザインリサーチ、構成論的研究と位置付ける。

8.今後の課題

これからのランドスケープデザインは新たなフェーズに来ていると推察している。人間がどのような風景をつくってきたのか、これからどうつくるべきかを認識しなければならない。コロナ禍の中、人間中心の考え方だけでなく、人ではないもの（ノンヒューマン）も含めて関係性を再構築する必要がある。ヒューマンスケール、空間認識の感覚をパラダイムシフトさせることが必要である。サイト・スペシフィックという概念のもと「風景」や「景観」を改めて見直さなければならない。「風景」はまなざしであり、「景観」は工学的で、そのまなざしを包括する。デザインする者は風景に対して責任が伴い、優れた審美眼と感性が要求される。協働する者同士がどういう風景感を共有するかで方向性も変わることから、常に対話によるデザイン行為を行うことが重要である。身の回りの環境を改めて見直し、足るを知り、心豊かに暮らせる社会の実現を目指す人々の努力が報われる世界であるべきである。

謝辞

本論文の執筆及び本研究を行うにあたり、お世話になったすべての皆様方に感謝の意を申し上げます。

研究対象地であるヴォーリズ六甲山荘では、認定 NPO 法人アメニティ 2000 協会の清水彬久理事長、清水順子事務局長はじめ、共に協働活動した皆様のご尽力とご協力に深く感謝申し上げます。研究を進めるにあたり、ご支援、ご協力を頂きながら、ここにお名前を記すことが出来なかった多くの方々に心より感謝申し上げます。

角倉起美